

感情史という実験場

高林陽展

近年、「感情史」という言葉を冠した書籍や雑誌が多数登場している。西洋史関連に限っても、ヤン・プランバー『感情史の始まり』（みすず書房、二〇二〇年）にはじまり、バーバラ・H・ローゼンワインとリツカルド・クリステイアーニによる『感情史とは何か』（岩波書店、二〇二二年）、さらに二〇二三年に入ってから伊東剛史・森田直子編『共感の共同体・感情史の世界をひらく』（平凡社、二〇二三年）の出版に加え、『現代思想』（青土社、二〇二三年一月号）が感情史を特集している。

四年以上にわたる共同研究のうえで二〇一七年に『痛みと感情のイギリス史』という論文集に寄稿した経験から、感情史は決して無縁の研究動向ではない。このテーマについて学生と話す機会もあり、感情史ってなんですか、どうやるんですかという問いかけに出くわすこともある。しかし、こうした問いに答えることは容易ではない。人間の基本的な感情には、幸福、怒り、悲しみ、驚き、嫌悪、恐れなどがあると言われるが、これらは感情史がはじめて扱った主題ではなく、これまでの歴史研究で様々な史料や方法によって扱われてきたものである。そうであれば、きつと感情史に関する様々な書籍や出版物は、「感情史とはなにか」「なにが新しいのか」という基本的な問いかけに何らかの答えを与えてくれる

感情史という実験場（高林）

だろう。そう期待したいところだが、はたして実際にはどうなのだろうか。

例えば、『共感の共同体…感情史の世界をひらく』刊行に寄せた編者によるウェブ記事には、感情史は歴史学のひとつアプローチであり、新たな歴史の見方を提供すると述べられている。では、どのようなアプローチなのかという点、その特色について書かれた部分では「感情史という調理法の特徴は何なのだろうか。答えは、『感情』に着目して史資料を分析するかどうか」と書かれている。つまり、怒りの歴史について調べたいのですが、どうすればいいですかと聞いてくる学生に、怒りに注目して史料や研究文献を読んでごらんとということになるのだろうか。もしそうだとすれば、これは、感情に迫るアプローチとは何かと問うて、感情に注目することだよと答えていることとなり、トートロジー（同語反復）となってしまう。つまり、何も説明していないのに等しいことになりはしないか。

近刊の『現代思想』感情史特集号も見てみよう。この号は、ドイツ史をベースとして感情史に関わってきた二人の研究者の対談からはじまっている。そこでは、感情に注目するのは、人間の相互理解のためには合理性だけでは限界があること、感情は頭で理解するものではなく客観的な基準だけで説明できないことが述べられ、そのうえで、理屈だけではわからないものを歴史学の叙述に取り込むことができるのだと、感情史の意義が説明される。なるほど、近代歴史学は、一八世紀以降の啓蒙思想の影響のもと、合理主義的な科学の一端を担う学問として登場し、もっぱら歴史を論理的に客観的に論じようとしてきた。こう言われると、少しわかった気になるだろう。

しかし、いわゆる理屈ではわからない歴史的な事象を読み解くことは、感情史がはじめて取り組んだ歴史学上の新しい課題ではない。西洋的・近代的な合理性から理解できないもの・ことについては、文化人類学が象徴や記号から読み解いてきた。そして、歴史学は二〇世紀後半に人類学から大いに学ん

きたのである。また、新しい文化史と呼ばれる二〇世紀末以降の研究動向でもまた、史料には明示されにくい社会や集団内における価値観やルールを探索してきた。心性史や感性の歴史といった研究動向も同様である。人々がものの考え方や感じ方を共有していたことを人間心理と心的相互作用に着目して読む点、一見非合理にも見え理解することの難しい感性や感覚について言説や言葉をはかりにして探求している点で、感情史と心性史・感性の歴史は共通点が多い。文化人類学を積極的に取り入れてきた、ある歴史家も、まったく同じではないとしても「遠からず」だと論じている。事実、感情史研究では、「感情体制」や「感情共同体」といった概念を用い、特定の地域や時代における感情表現のあり方を規定する文化的な枠組みを探索することを提起する研究者もいるのだが、この手法は文化人類学や文化史研究で実践されてきたアプローチとそう変わりがない。こうした指摘に対して、前出の『現代思想』対談では、「心性」は静的で構造的なもので感情はより動的で短期的なものだと違いが強調される。しかし、それだけの違いでわざわざ感情史と言わねばならないものだろうか。

それにもかかわらず、『現代思想』対談では、感情史は、これまでの史料解釈では見えてこなかったものを視点や問題関心の变化から史料の読み直しをする「新たな道具」だと述べられている。そして、それはかつて社会史も同様だったという。これは、本当だろうか。

社会史は、第二次世界大戦後に世界が民主主義化してゆく過程において、政治経済の歴史が歴史学の主流を占め、人々の生活や文化が見えてこないことを問題視し、そこに光をあてることを目指した研究動向である。公文書や法令といった行政史料以外の史料を探索し、こうした公の文書を使う場合もその行間から人々の生活や文化を読み解こうとした。そのような「下から」「周縁から」「地域から」の歴史研究の成果によって、私たちの歴史観・人間観・世界観はより多層的・多軸的なものへと大きく更新された。

感情史という実験場（高林）

ここで大事な点は、民主化する社会にみあった歴史観（過去の見方）を探求することが、社会史のミッションだったことである。歴史学の研究動向にはそれぞれ、その当時の世界を背景にしたミッションがある。感情史のミッションについては、感情史研究者たちは、アメリカ同時多発テロへの対応など比較的近年の出来事を挙げている。そこでは、今の時代が多大な感情表出を特徴とし、それが歴史を動かす要因となりつつあることを指摘している。とってつけたような説明であり、今を生きる私たちのどのようなミッションに基づき、これまでの歴史観にかわってどのようなイメージを提示しようとしているのかはあいまいなままである。それだからだろうか。感情史を研究するとこれまで一般的だった研究史上の通説や歴史観、あるいは人間観や世界観がどう変わるのかという展望もはつきりしない。

感情史とは何かという問いに対して、多くの「感情史研究者」が言葉をにこし、あいまいな態度に終始しているのは、ある点をおそらく意識的に避けているからである。それは、感情史が本質主義と構築主義という二つの世界観をめぐる実験場として登場したということである。ここで言う本質主義とは、ある歴史事象に普遍的な実体があるという考え方のことである。例えば、人種というとき、同じ人種では共通する生物学的な根拠があると信じる立場のことである。これに対して構築主義では、人種をめぐって様々な言葉が発せられることに注目し、言葉が先行して人種は実際に存在するのだという現実をつくりだす、そのような歴史的局面を重視する。この二つの考え方は、世界をどう見るのかという世界観を二分するものであり、これまでに多くの議論が戦わされてきた。

感情史は、この二つの主義の対立を前提として登場した、ひとつの歴史学の「実験場」である。その起点には、なによりも二〇世紀末以降の神経科学と認知科学の発展があった。これらは、精神の機能を脳神経の機能や情報の認知の仕組みから解き明かそうとする学問である。こうした学問領域では、進化

の過程で習得された認知機能が感情のあり方を大きく左右していると理解されるようになった。歴史学では人間の感情は場所や時間に左右されるものと理解するが、認知科学・神経科学ではそれがいつでも同じだという、本質主義的な理解となる。

例えば、梅田聡・小嶋祥三監修『感情…ジエームズ／キャノン／ダマシオ』（岩波書店、二〇二〇年）では、人間は「クマに出くわし、怖くなったから震える」という外的な脅威を認知してから恐怖という感情が生起するのではなく、「クマに出くわすことで身体が震え、それによって怖くなる」という問題を提起している。人間は、クマのような脅威を感じうる動物に出会ったとき、実はそれははじめての遭遇ではない。何世代にもわたって同様の脅威を経験してきており、その経験から、まず身体が脅威に対して自動的に震えを起こさせる。その身体のメッセージが脳神経に到達し、そこでようやく「怖い」という感情が主観的に認識される。つまり、脳が脅威を感じて感情が生まれるのではなく、進化の過程で身に着けた脅威を感じると震えるというメカニズムがあるというのである。つまり、恐怖という感情は進化の過程で人間がみな身に着けたものだというのである。

感情史研究の第一人者だったブランパーが、『感情史の始まり』の冒頭で神経学者ジョセフ・ルドウの闘争本能研究、すなわち人間が脅威と感じる生物に遭遇した際に戦うか逃げるかの反応をするための自律神経が一二ミリ秒という短時間で活性化されるという議論に触れているのも、認知の自動性という自然科学の知見が歴史学にとって重大な示唆を持つと考えたためである。認知科学・神経学者の言うように、感情は普遍的なものなのか。感情に歴史はあるのか。こうした問いから「感情史」は始まったのである。

そして、感情史研究を先導してきた歴史家たちは、ときに認知科学・神経科学の知見を用いて歴史の書き換えを試みたり、あるいはそれに抗して感情にも地域性・時代性があるということを主張していっ

感情史という実験場（高林）

た。後者においても、認知科学・神経科学を一樣に否定するのではなく、その世界観を部分的に借用したり翻案する試みもなされた。こう考えてゆくと、感情史固有の新しさとは、神経科学・認知心理学の知見ないし世界観と向き合った歴史学と言うことができるだろう。しかし、日本の感情史研究者にはそのことが十分に理解されているようにみえない。このことが、すでに述べたような「あいまいさ」や「わかりにくさ」を生んでいる。何度か言及した『現代思想』の対談でも、感情史が登場した背景には「二〇世紀末の脳神経科学の発展もあったでしょう」と一言述べるだけでそれ以上深く立ち入ろうとしていない。むしろ感情史が「脳神経科学に限らず」様々な要因から発展してきたことが強調される。つまり、感情史研究がその根底に持っている、感情は普遍的なものなのか、感情に歴史はあるのかという問いかけを、日本の感情史研究者／紹介者は共有していないように思われる。したがって、こうした姿勢のもとで感情史研究が試みられるとき、「これは感情だ」と私たちが通念的に思うような問題がとりあげられ、「〇〇の感情史」という研究が量産されるだけだろう。このことは、『感情史の始まり』でヤン・プランパーが既に警告した危険性であるが、なぜか日本では適切に理解されていないように思われる。

認知科学・神経科学が歴史学に突きつけているのは、人間心理を理解するモデルを更新することに他ならない。感情が普遍的で自動的だという考え方は、私たちが漠然と信じている、ある人間心理のモデルを否定するものである。それは、個々の人間が主体的に意識をもち、それに基づいた行動をとるという古典的な啓蒙思想に基づくモデルである。このような人間心理のモデルは、構造主義や文化人類学的な視点にもとづく研究によって二〇世紀半ば以降に相対化されつくされており、認知科学・神経科学の知見がことさら新しいわけではない。しかし、私には意識がある／主観性はあるのだという誰しもが感じうる素朴な直観にもとづく歴史書はいまだに多く存在する。さらに言えば、認知科学・神経科学が仮

想敵としているのは、人間の意識下には無意識があり、それが意識の動きを根本的に規定しているのだという、いまだ根強く信じられているフロイト的な心理学理解でもある。漠然と私たちが採用してきた人間心理モデルに対してその更新を強く迫り、それに基づく歴史叙述も刷新されるべきだというのが、感情史によるもつとも重大な問題提起にほかならない。

加えて言えば、神経科学・認知科学は時間軸についても重要な問題を提起している。彼らの新しい科学は、人間の思想や行動、あるいは政治経済上の事件や体制変化をもつて時間の隔たりをとらえるのではなく、進化と発達という長期にわたる時間軸に基づいた過去の理解を提起しているからである。

私たちがこれまで依拠してきた心理学的な準拠枠を見つめなおし新たな準拠枠を受け入れるのか。新たな準拠枠を参照しながら過去の感情へのアプローチ方法を考えるのか。それによって次代の歴史学を構想しようとするのか。こうした問い、すなわち構築主義と本質主義という世界観をめぐる問いが、感情史の始まりにはあり、それを考えるための実験場が感情史である。だからこそ、プランパーは『感情史の始まり』で、感情を扱う歴史の長さ、人類学と神経科学、文化構築主義と本質主義といった順で語り、そのうえで、感情史の実験場で実践を試みようとする歴史家に対して神経科学の理解力を高めることを求めた。歴史家が構築主義の正当性を考え、時間と空間を扱う学問としての歴史学の意義を考えてゆくその前に、である。

このように言うと、感情史を狭くとつている、可能性を減じているという声も出てくるかもしれない。それは的外れな指摘である。感情史は、神経科学・認知科学と向き合い、そうすることで既存の歴史学からあえてはみだそうとする実験場であり、そもそも向き合うつもりがなく、これまでの文化史・構築主義の立場でよいということであれば、「感情史」などと名乗らず、「○○の文化史」と言えはいいだけ

感情史という実験場（高林）

のことである。

かつて夢野久作は小説『ドグラマグラ』（一九三五年）において、「胎児の夢」という言葉で、人間の胎児が体内にいる間に何百億年の進化の過程をなぞっていることを表現して見せた。私自身は、歴史学における自然科学、とりわけ認知科学や神経科学の無批判な受容には抵抗を覚える。しかし同時に、「胎児の夢」で示されるような進化を軸にした時間の感覚を、時間を扱う歴史家が無視してよいはずはないとも考えている。だからこそその「実験場」である。歴史における感情に迫るために、なんとなく知っている感情概念に依拠するのではなく、むしろ私たちが依って立っていない自然科学的な感情理解と向き合うこと。それを「始まり」として、過去をどう描くのか、歴史叙述の可能性を探究する。その実験の先にこそ、感情史の歴史学上の意義が見出しうるのではないか。そう考えてゆくと、「感情史とは何か」「何が新しいのか」という素朴な問いに対して端的に答えることはまだ難しいだろう。少なくとも日本では、感情史という実験はこれから始まるのだから。

参考文献

- 『現代思想』（青土社、二〇二三年一月号）
 「人びとは共感を、どのように経験し、また言語化してきたのか——」（じんぶん堂、二〇二三年一〇月
 二十日）<https://book.asahi.com/jinbun/article/15038779>
 梅田聡・小嶋祥三監修 『感情：ジェームズ／キャン／ダマシオ』岩波書店、二〇二〇年
 ヤン・プランパー 『感情史の始まり』みずす書房、二〇二〇年

（本学文学部准教授）